

2 ポリフォニー

じつは、〈ポリフォニー〉とは、このような〈対話主義〉を『ドストエフスキイの創作の問題』(1929)において作品分析に適用したものであった。

〈対話〉と〈ポリフォニー〉の区別はバフチン自身も徹底していないのだが、ドストエフスキイ論では「ドストエフスキイのポリフォニー小説における、主人公にたいする作者の新しい芸術的立場とは、真摯に実現され最後まで推し進められた対話的立場であり、こうした立場が主人公の自立性、内的自由、未完結性、未決定性を保証しているのである」と述べられている。

バフチンによれば、ドストエフスキイの（短篇や中篇でなく）長篇小説では、登場人物や作者の声や意識が複雑に絡まり合っている一方、それらは互いの自立性、独立性は保ったままであり、一つに溶け合ってはいない。また重要なことに、作者は登場人物たちを客体化、モノ化しておらず、かれらと対等に対話をしている。作者だけが神のような位置にあり、登場人物すべてを知っており、性格づけているようなモノローグ小説とは異なる。こうした創作方法を、バフチンは〈ポリフォニー〉という用語のもとに念頭においていた。

バフチンはこれを音楽用語〈多声音楽〉から借りて比喩として用いていると断っているが、この用語からは「多数の（ポリ）」の「声（フォニー）」ということが連想されがちである。事実、バフチンから学んだか否かはさておき、文学研究者や文化研究者のなかには、〈ポリフォニー〉を声の複数性という意味で用いている例が少なくない。文化どうしの対話などを指して、「文化のポリフォニー」といったように使われたりもしている。

じつは、『ドストエフスキイの創作の問題』の展開の仕方も、こうした解釈を招く一因になっている。冒頭で〈ポリフォニー〉が強調されているからには、その例が列挙されていくものと思いつかや、そうはない。挙げられている例のほ

とんどが、登場人物のことばのなかに他者のことばが入りこんで、一個人の声が複数の声からなっているようなケース、すなわち〈内的対話〉なのである。

しかし、〈内的対話〉と〈ポリフォニー〉は、〈対話〉という点では共通するものの、根本的なところで違っている。〈ポリフォニー〉の場合は、「声の複数性」だけでなく、「自立した人格どうしの対等な関係」が不可欠な要素となっている。

なお、そもそもポリフォニー小説なるものが成立可能なのかについては評価が分かれており、仮に可能だとしても、その場合の作者はあまりに消極的ではないかとの批判がある。これに対してバフチンは、ポリフォニー小説の方がむしろ作者は能動的であることを力説している。通常は、ひと（主人公）を一方的に決定づける側が能動的であると考えるところだが、バフチンからすれば、ひとを一方的に決定づけない姿勢を貫くほうが、はるかに大きな能動性、緊張を要する。これをバフチンは〈対話的能動性〉と呼んでいる。

また、バフチンは、〈ポリフォニー〉的な姿勢が相対主義と異なることも強調している。「みんな違って、みんないい」という、対話なき相対主義にとどまるのでなく、自立し互いのあいだに差異を宿した者どうしが、対等な関係のなかで能動的に対話を交わす行為こそが、〈ポリフォニー〉なのである。

参考文献

- 1) バフチンM.『ドストエフスキイの創作の問題』(桑野隆訳、平凡社ライブリー、2013)。
- 2) バフチン、ミハイル:『ドストエフスキイの詩学』(望月哲男、鈴木淳一訳、ちくま学芸文庫、1995)。
- 3) 桑野隆:『バフチン』(平凡社新書、2011)。

(くわの・たかし:ロシア文化)

●特集● 公共圏における多声性

大阪七墓巡り復活プロジェクトとは何か?—無縁化社会での死生観光の試み

かつて江戸時代の大坂には盆になると無縁仏を供養する「大阪七墓巡り」という不思議な風習があった。明治時代以降は失われてしまった幻の伝統であったが、東日本大震災をきっかけとして、筆者が「大阪七墓巡り復活プロジェクト」と題して、毎年、有志と七墓跡を巡っている。謎めいた七墓巡りとプロジェクト復活の意図、その実践の結果を報告する。



陸奥 賢

はじめに

かつて大阪には都市近郊の墓地を7カ所お参りして無縁仏を供養する「大阪七墓巡り」という風習があった。あまり詳しい史料などではなく、いつの時代から始まったのかよくわからないが、浄瑠璃作家の近松門左衛門が七墓巡りを盛り込んだ『賀古教信七墓廻』という作品を書いている。『外題年鑑』によると「元禄十五年七月十五日上演」とあるが、こうした記録から推察すると元禄（1688～1704）の頃には、すでに七墓巡りの風習は成立していて、芝居の演目になるぐらいには、当時の大阪の町衆のあいだでも一般認知されていたものと思われる。

七墓巡りを実施する時期は孟蘭盆会の頃といい、近松の『賀古教信七墓廻』が旧暦7月15日に初演なのも、そうした時期を意識したことだろう。また初演のさいには地獄や賽の河原の情景などを人形で見せる趣向など

●むつ・さとし●

1978年生まれ。観光家、コモンズ・デザイナー、社会実験者。著書:『まわしよみ新聞をつくろう!』(創元社、2018)。

キーワード: 観光 (sightseeing), 供養 (memorial service), 巡礼 (pilgrimage)
著者連絡先: mutsu_satoshi@ybb.ne.jp

もあったという。いかにも子供騙しの幼稚な趣向に感じるが、実際に当時の観客も微妙な反応で『賀古教信七墓廻』は一度だけの上演で、これ以降の再演の記録はないという。

近松門左衛門も題材にした大阪七墓巡りと、その復活プロジェクトについて述べたい。

1 七墓の所在地について

七墓巡りはいろいろと謎めいているが、七墓の所在地についても不明確な部分が多い。『賀古教信七墓廻』では第四段「夏野のまよひ子」の中に七墓が登場してくるが、その原文を抜粋すると「あだし煙の梅田の火屋」「短か夜を誰が慣わしの長柄川」「道のなき野原 笹原葭原の」「泣き泣き歩む夏草の蒲生」「それとも知らず別れ行末は小橋の」「寺の鐘の聲高津墓所に夕立の」「煙知るべに千日の」「これぞ三途と一足に飛田の」と近松お得意の掛詞で調子よく次々と大阪の墓地が登場していく。しかしよく読むと①梅田②長柄③葭原④蒲生⑤小橋⑥高津⑦千日⑧飛田と七墓巡りであるのに「8カ所の墓地」が紹介されている。

これは一体どうしたことかと他の文献を調